

春の夜は

芥川龍之介

僕はコンクリイトの建物の並んだ丸まるの内の裏通りうちを歩いてゐた。すると何かにほひ勻を感じた。何か、？——ではない。野菜サラダの勻である。僕はあたりを見まはした。が、アスファルトの往来には「#」往来には「は底本では「往来には」五味箱ごみばこ一つ見えなかつた。それは又如何にも春の夜らしかつた。

U——「君は夜は怖くはないかね？」

僕——「格別怖いと思つたことはない。」

U——「僕は怖いんだよ。何だか大きい消しゴムでも噛んでゐるやうな気がするからね。」

これも、——このUの言葉もやはり如何にも春の夜らしかった。

僕は支那の少女が一人、ひとり電車に乗るのを眺めてゐた。それは季節を破壊する電燈の光の下だったにもせよ、實際春の夜によ違ひなかつた。少女は僕に後ろを向け、電車のステツプに足をかけようとした。僕は巻煙草を銜くはへたまま、ふとこの少女の耳の根に垢あかの残つてゐるのを発見した。その又垢は垢と云ふよりも「よごれ」と云ふのに近いものだった。僕は電車の走つて行つた後のちもこの耳の根に残つた垢に何か暖さを感じてゐた。

四

或春の夜^よ、僕は路ばたに立ち止つた馬車の側を通りかかつた。馬はほつそりした白馬^{しろうま}だつた。僕はそこを通りながら、ちよつとこの馬の頸すぢに手を触れて見たい誘惑を感じた。

五

これも或春の夜のことである。僕は往来わうらいを歩きながら、鮫さめの卵を食ひたいと思ひ出した。

六

春の夜の空想。——いつかカツフェ・プランタンの

窓は広い牧場ほくちやうに開いてゐる。その又牧場のまん中には丸焼きにした鶏が一羽、首を垂れて何か考へてゐる。

……

七

春の夜の言葉。——「やすちやんが青いうんこをしました。」

或三月の夜、僕はペンを休めた時、ふとニツケルの懐中時計の進んでゐるのを発見した。隣室の掛け時計は十時を打つてゐる。が、懐中時計は十時半になつてゐる。僕は懐中時計を置き火燵ごたつの上に置き、丁寧ていねいに針を十時へ戻した。それから又ペンを動かして出した。時間と云ふものはかう云ふ時ほど、存外ぞんぐわい急に過ぎることはない。掛け時計は今度は十一時を打つた。僕はペ

ンを持つたまま、懐中時計へ目をやると、——今度は
不思議にも十二時になつてゐた。懐中時計は暖まると、
針を早くまはすのかしら？

九

誰か椅子の上に爪を磨いてゐる。誰か窓の前にレエ
スをかがつてゐる。誰かやけに花をむしつてゐる。誰
かそつと鸚鵡あつむを絞め殺してゐる。誰か小さいレストラ

ンの裏の煙突の下に眠つてゐる。誰か帆前船ほまへせんの帆をあ
げてゐる。誰か柔い白パンに木炭画の線を拭つてゐる。
誰か瓦斯ガスの匀にほひの中にシヤベルの泥をすくひ上げてゐ
る。誰か、——ではない。まるまると肥つた紳士が
一人、ひとり「詩韻含英しむんがんえい」を拈ひげながら、未だいまに春宵しゆんせう「#ルビ
の「しゆんせう」は底本では「しゆうせう」の詩を考へて
ゐる。……

(昭和二・二・五)

底本…「芥川龍之介作品集第四卷」昭和出版社

1965（昭和40）年12月20日発行

入力：j.utiyanama

校正…かとうかおり

1999年1月27日公開

2010年11月27日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで
す。